

第18回全国男性保育者研究交流集会

基調講演 「虫の世界に見る男女平等～虫の世界の男の役割」

澤口たまみ先生～エッセイスト、絵本作家

保育は、非常に大切な仕事。その中で使われている絵本は、まっさらな状態で産まれてくる子ども達にとって、この世界のことを伝えるガイドブックである。

絵本には物語絵本と科学絵本がある。

科学絵本は事実に基づいた内容、自分が書いているのは絵本の文章であるが、子ども達が身近に目で見えて触れることの出来る題材にこだわっている。

絵本ではいろいろな体験をすることが出来る。子ども達に、この世界が自分たちが生きていくに足る素晴らしい世界であることを伝えることが出来る。

絵本の結末は、子ども達が野原に出かけ同じ体験をすることこそが本当の結末。

0歳から3歳頃までの赤ちゃんや子どもが周りから受ける影響は非常に大きく、その子の人生に大きな影響を与える。

自然について伝えることは、子どもの一生にかかわることである。

あるがままの物を感じ取り触れ合っていくこと、自然と交流する力を身につけることは、人が人として生きていくことでもある。

人間は自然の中でしか生きていけないが、今の人間は自然の中で生きる力を失ってはいないだろうか？その力を失ったがために、様々な社会問題が起きている。自然の中で生きる力を取り戻せば、それらの問題も解決するのではないだろうか？

保育士には自然の中で子ども達を育てて行って欲しい。

保育士や子どもの親には、子どもがすることを見守る大人でいて欲しい。大人が教えるたった一つのことは「危険の回避」のみ。「怪我をしたら困るからやらない」、「触れさせない」ではいけない。

ほとんどの毛虫は触ってもかぶれない生き物で、本当にかぶれるのは100種類中2種類程度で死ぬ人もいない。実際に触れさせることで、触っても良い毛虫と触ってはいけない毛虫を見分ける力が育ってくる。

身近な大人が虫嫌いだと子どもも虫嫌いになってしまう。保育者は自分の好き嫌いを持ち込んではいけない。

人間である所以は、脳の発達と二足歩行であるが、それは親に養育される期間が長くなる事も意味している。

虫に子育てはない。雄の役割は精子の提供のみで、次の世代を決めるのは卵の数である。雌が死ぬことは大損害だが、雄は代替えがきく。

～蚊柱の話、コオロギの話、ハチの話、カマキリの話

自然界の虫の価値観のベクトルは一つではない。人間は勉強？スポーツ？

本当に大切なのは、勉強などではなく自然体験。それは父親の役割、保育所における男性の役割である。戸外での遊び=狩猟採集生活をモデルにした遊びは、脳の発達に意義があり、そこで果たす男性の役割は非常に大きい。

知識を与えるより自然体験をさせることが重要。小さいうちに知識を詰め込むのではなく、大きくなった時に「知りたい」、「調べたい」と思えるような原体験を与える。

人間は「自然の中で生きている」ことの意味を改めて考えなければならない。保育所でしか、その年齢でしか経験出来ないことをたくさんさせて欲しい。

その中で身についてくるのは、言語外コミュニケーション。子どもは人間以外の生き物とのコミュニケーションを通して、小さな生き物たちの言葉にならない声を聞いている。そのことが子どもが成長していくなかで、相手を思いやる気持ちの芽生えにつながる。虫に優しさを感じる子は、人にも優しさを感じることができる。

現在のいじめ問題にもかかわりがあると信じている。

また、虫たちは命の大切さを教えてくれる。虫は死ぬことが運命、それでも最後の最後まで懸命に生きようとする。その姿を子ども達に知らせたい。

昨日まで生きていた生き物が死んだ時に、人は心に空く穴を感じる。そして、もし自分が死んでしまった時に周りの人間の心に穴が空くことを想像することにつながる。

「死にたい」と思うことと、本当に死ぬ事の間には大きな隔たりがあり、その境目にはやはり小さい頃の自然体験がかかわってくると思う。

保育とは、すぐに答えが出る物ではない。いつ出るのかはわからない。大人になってから出るかもしれない。その時に自然で遊んだ思い出が人を支えてくれる。保育士には、このことを心にとめて頑張ってもらいたい。